

保育者の限界と実力

津守 真

この夏のはじめ、ある研究会の席のことであった。八年前に私が保育の実践の場で毎日をごすうになつてから、私の保育論は変わったかとたずねられた。私はその場で直ちに、この八年間余の実践の中で、考えを変える必要は生じなかったとその方にお答えした。その後、私はこの答え方でよかつたのかどうか、あらためて考えた。そして、次のようなことに気が付いた。

*

私の学校は、全体で約三十五人の子どもを、毎年、四、五クラスに編成している。幼稚部、小学部一、二年生、三、四年生、五、六年生と大体年齢順である。どのクラスも二、三人の職員が担任する。私も数年間クラス担任のひとりに加えてもらつた。担任をすると、子どもが私を頼りにしてくることが肌で分かる。毎日のこまかな様子を親に話し、親も家庭で起こつたその日のことを話してくれて、生活の様子もよく分かる。親子ともに親しみが増して、



保育の中で私自身が温められてゆくような経験をしました。以前には、同じ子どもと毎日接していてよく飽きないものだと思ったことがあったが、それだからこそ面白いのだということも分かった。

その反面、子どもの安全も健康も、自分が守らなければ他にはだれも守る人がいないという責任感も感じる。これは研究者の立場で実践にふれていた時にはなかった感覚である。また、管理者の立場に立ったときには、財政や全体のことには目が向いて、子どもとの生活に一日中浸ることはできない。その点、担任をしている時が、いちばん児童研究者になれる時である。

ある年、長年手がけた子どもたちが六年生を卒業し（私の養護学校では、幼児期から小学校卒業まで十年位を過ごす人が少なくない）、新しい子どもたちがいちどきに入学したことがあった。この年とそれにつづく一、二年間は、どの職員も自分の担任するクラスを守るだけで精一杯だった。私が担任した

クラスも同様で、一瞬の間になくなってしまいう子どもや、どうしても外にいきたい子どもなどがいて、自分のクラスの子ども達から片時も目を離せない状態がつづいた。三人の担任がたえずお互いに連絡し合って動かねばならない具合だった。私は日頃、学校全体の子どもを、職員全員が見ることを強調してきたが、その時は、こんなことを言っても空虚に感じられさえた。どのクラスも同じような状況だったと思う。皆が必死になって、自分の担当する子ども達から目を離ることができなかった。多分、その時に来られた外来者は、網の目のように注意を張りめぐらした大人達の緊張感に、異様な感を抱かれた方があったのではないかと思う。

そういう時には、他のクラスの子どもが部屋に入ってきて、その子が何をしようと思つて来たのかが目に入らず、邪魔者にしか見えない。まして、その子が自分のクラスの子どもの遊んでいる物を取ったり、髪を引っ張ったりしたら、自分のクラス

の子どもを守るために、戸をしめて鍵をかけることの必要が本気に論じられたりもしたのであった。そして実際そういうことも起こった。

それから数年を経たいまは、あの時どうして皆がそんなに自分のクラスに対して防衛的になったのか不思議に思う程である。当然のことながら、同じ子どもがいまは遙かにおだやかに、大人との関係も確かになっている。その現在を規準にして考えると、あの頃の大人の行為に対して批判的な眼を向けようになる。

しかし、あの時に身をおき直して考えてみると、その大変な状況のもとでは、皆が自己防衛的になったのも、無理からぬことだったと思う。それは自己弁護であろうか。もっと本質にもどって考えるべきだったかもしれないのに、そうできなかったところに、私をも含めてそこにかかわった人々の実力の限界があつたのだと思う。

事件はそういう時に起こるものである。

ひとりの子どもが弱い子どもをひっかいて傷つけたことが、親の間の問題になり、学校全体を巻きこむことになった。私共は卒業式の前日に、母親全部に集まってもらって懇談会をし、できるだけ率直に話し合った。その内容については省略するが、はじめはその子どもをめぐるの私共の対応の仕方の問題かと思っていた。しかしその後次第に分かってきたことは、それはその子の問題ではなくて、その頃、学校全体がお互いのコミュニケーションを欠いたところに、問題の核心があつたのではないかということであつた。親はそういうことに関して敏感である。

春休みに、何日も、職員全員が本気になって、クラス相互の交流をめぐって話し合った。そして、各クラスの部屋に通じるドアの鍵を全部取り除き、子どもも大人もいつでも自由に出入りできるようにした。そのことはただ物理的なことだけでなく、大人達の気持ちが力動的に交流するのを助けた。

一時期、相互のコミュニケーションを欠くに至ったのは、私共の実力の限界によるものだったが、時間がかかってもコミュニケーションを回復し、全体が力動的に動くようになったのも、職員の実力によるものだ、と思う。

*

実力とは何か。人には自分の努力では越えられない限界があるが、機会が来た時には、その限界を越えさせる潜在的な力もまたある。おかれた状況の厳しきによってはその力を発揮することができず、自分が掌握できる範囲を守るだけで精一杯になってしまう。心のどこかにそれでは何だか変だと思っていると、そこに破れ目ができる。完璧を求めて過度に自分を防衛していると、自分自身にも進歩がなくなるし、他者の成長に目を向けるゆとりもなくなってしまう。

人の中にあるこのような限界とそれを越えさせる潜在力を自我の力と言ってもよいと思う。それは個

人の成長の過程において育てられる面は大きい、それだけではない。職員同士の関係の中でそれは育てられる。

*

保育は子どもの自我の成長にかかわる仕事であり、保育者は子どもの保育を通して大人になった自分自身の自我の成長の機会に恵まれている。その毎日の保育の具体的なことを職員同士で話し合う時に、それが大人同士の成長の場となる。親との間も同様である。

最初の質問にもどるが、私は実践の場で毎日過ごすようになって、実践を成り立たせている背景の場について、学ぶところが多くあった。保育の実践には厳しい時があるが、その中であっても、保育者が、子どもの世界の物質のイメージに対する想像力を失ったら、その実践は味気ないものになってしまう。

(愛育養護学校)